
魔王の息子だが、勇者になる！

hate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の息子だが、勇者になる！

【Nコード】

N4593X

【作者名】

h a t e

【あらすじ】

俺は魔王の息子として生まれたが、そんなの関係ねえ！俺は、俺の思うがままに生きてやる！旅をして強く頼もしい仲間を集め、勇者になって魔族を撃退し、人間の世界で成り上がってやる。そうして、美しい姫かエルフ娘を嫁にして、一国の王になってやる！逆らう魔族は、もちろん皆殺しだ！

第1話 旅立ちの日

今朝の目覚めは、最悪だった。今日は記念すべき特別な日なので気持ちよく起きたかったというのに、部下の女達がベッドの中に潜り込んでいやがったんだ。おかげで口の周りとか、ちよつと人に言えない場所とかに女達の唾液がべつとりと付いてやがった。げっ、思い出すだけでも気持ち悪い。

もちろん、女達は漏れなくお仕置きをしておいた。しばらく俺に会えなくなるからという理由があつたとはいえ、そんなの俺には関係ねえ。俺の爽やかな目覚めを奪つた罪は重いからな。おまけに、返り血で俺の服を汚しやがったんだ。ますますもって許せねえ。頭に來たんで、半殺しにしておいたぜ。

顔以外はボコボコにしておいたが、あいつらが悪いんだからしょうがないだろう。もっとも、俺はこれから当分の間猫を被らなきゃならないんで、こんな暴力的なことはしばらくは出来ない。だから、ちよつどいい憂さ晴らしにはなつただけだな。

「王子様、どうぞこちらへ」

俺が考え事をしながら魔王城の中をぼーっとしながら歩いていると、親父の部下が現れた。どうやら親父のところ以案内してくれるらしい。自分の家の中ぐらい、案内されなくても大丈夫なんだが、まあいいだろう。俺は、そいつの後を付いていくことにした。

魔王の間に入ると、そこには大勢の魔族が集まっていた。魔人族、竜族、妖魔族、獣人族、半獣族の主だった連中がいた。100人以上はいるな。まさか、俺のためにこんなに大勢の魔族、それも幹部連中が集まるとは、恐れ入ったぜ。

さすがの俺も、失礼になるから今被っている仮面を外そうかと考えたが、思いとどまった。それでは、常日頃から仮面を被っている意味がなくなってしまうからだ。魔族の連中に、顔を覚えられないようにと顔を隠してきた苦労が、水の泡になってしまいうからな。

魔王の間は、相変わらず広い。今の魔王城の中で、最も広い部屋だ。200人位、余裕で入るんじゃないか。ま、広いだけで豪華さには欠けるがな。もっとも、実用性は十分あるけどな。その点、人間の王の方が、実用性を無視して無駄に豪華にしそうだな。

親父、すなわち魔王は、魔王の間の奥にある一段と高い豪華な椅子に座っていた。相変わらず、強い魔力と威圧感を感じる。小さい頃は見ただけで怖かったが、さすがに今はもう慣れたのでなんともない。

俺は、まっすぐ親父の方に向かって歩いていく。そして10メートルほどの距離まで近づくと立ち止まり、片膝を付いて恭しく一礼する。公式の場では、親子といえども公私のけじめをつけなければならぬから、どうしても仰々しくなってしまう。だが、こればかりはしょうがないだろうな。

「父上、私のわがままを認めていただき、ありがとうございます。」

これから私は人間どもの国々を滅ぼすために、旅に出ようと思います。長い間留守にいたしますが、よろしく願います」

俺は、なんとも言えない気分だった。人間どもの国を滅ぼすために敵情視察をしたい、という名目で旅することが認められたのがつい先日のこと。長い間の苦勞が実つて、ようやく自由に旅をするところまでこぎ付けられたんだ。思えば、ここまでの道のりは長かったな。だが、苦難の日々は今日で終わる。これからは、俺は思い通りに生きるんだ。

そう、誰にも言っていないが、俺は勇者になりたいんだ。そして、思うがままに冒険がしたいんだ。魔族なんて、野蛮で低脳な奴らは今日でおさらばさ。俺は、俺の人生をやり直すんだ。

女だつてそうだ。夜這いをかけて来る淫乱女達なんて、願い下げだ。清楚で綺麗な娘、凛々しくて美しい娘、安らぎを与えてくれる可愛い娘、そんな素敵な娘達と恋に落ちて、素晴らしい人生を送るんだ。

俺は、俺は、今日、この日をもって生まれ変わるんだ！

数日後、俺はとある島にいた。魔王城から召還魔法を何度も使ってたどり着いた。ここは、10か所以上ある隠れ魔王子領の一つ。表面上は人間の国の領土だが、裏では俺の部下である魔族が支配している。だから、大抵のことは俺の思い通りになる。

今ではこういう島がたくさんあるので、非常に便利だ。何かあった

時には、この島の人間を使って俺の手助けをさせるつもりだ。俺自身は、魔族とは直接会うことはない。万が一にも、俺が魔族であると知られたくはないからだ。

俺は、この島の近くにある都市で仲間と落ち合って、旅をする予定だ。この日のために1年前から仲間探しをしていて、最近ようやく信頼できる仲間が見つかったからな。

「やあ、カイン。もう用意はいいのか？」

借家で旅支度をしていると、アントニウスがやって来た。こいつは美形のエルフで、剣士であるうえに魔法も使えるという便利な奴だ。身長は俺よりも少し低く、スリムな体型をしている。年齢は教えてくれないが、18歳くらいに見える。

「ああ、大体終わったところかな。そういうお前はどんなんだ？」

俺の荷造りは、ほとんど終わっていた。この島から持ち出すのは最低限の装備だし、それ以外は仲間と落ち合う予定の交易都市で購入するつもりだからな。

「俺も、とうの昔に荷造りは終わっている。良かったら、一緒に飯を食わないか？」

彼の誘いに、俺は乗ることにした。

彼と一緒に酒場に行くと、先客が待っていた。剣士のシモネッタと魔法使いのモニカだ。俺達が来ると思つて、ここで待ち構えていたらしい。

「おう、やっと来たね。待ちくたびれたよ」

最初に口を開いたのはシモネッタ。アントニウスと同じ背丈の剣士だ。筋肉質な体格で胸は標準よりも大きめ、性格はさばけていて、下ネタも平気な女だ。美人とまではいえないが、そこそこ見れる顔をしている。中の上といったところか。

「本当に、遅いですよ」

次は、シモネッタよりも少し背が低いモニカ。スリムな体型に、シモネッタよりも更に大きな胸。人見知りする性格だが、慣れるとよくしゃべる。魔法も弓も使えるという、案外器用な女だ。顔も整っていて、美人と言うより可愛い顔といった感じ。上の下といったところか。

「いやあ、遅れて悪いな」

俺はそう言いつつ、シモネッタとモニカの胸をむんずと掴む。けらけらと笑って動じないシモネッタと、真っ赤になって怒るモニカの対比が面白い。

「あんな、カイン。そういうことは、これからはやめてくれよ」

アントニウスは頭を抱えるが、俺はやめるつもりはない。俺は、やりたいことは、自由にやりたいんだ。誰に迷惑をかけるわけでもな

し。えっ、女達に迷惑がかかるって？んなことはない。彼女達も胸が大きなるんだから、迷惑どころか有難いと思っっているに違いないんだ。

こうして、この島で落ち合う予定の仲間は全て出会った。次の仲間に出うため、明日はこの島を出る。そして、俺の壮大な旅（になるに違いない旅）は、この日から始まるんだ。

第2話 出港と根回し

今朝の目覚めは、なかなかいい。両手がふかふかなものを掴んでいたからだ。ふかふかなもの、それは何か。それはズバリ、豊乳である。そう、俺は女を後ろから抱きしめつつ、両手で豊乳をしっかりと掴みながら眼が覚めたんだ。だから、目覚めが悪いはずがない。

「んー、また少し大きくなったみたいだな」

俺は胸の発育具合を確認するため、両手をモミモミした。するとあら不思議、幸せな気分になるじゃないですか。過去の偉人が、巨乳のことを『幸せ製造器』と呼んだという逸話を聞いたことがあるが、それは正に真理だろう。

ところが、そんな幸せな気分に浸っていた俺の邪魔をする、無粋な人間がいた。まったくもってけしからん奴だ。懲らしめなければならぬ。俺は更に激しくモミモミすることにした。

「んもー、いいかげんにやめてくださいよー。カインのドスケベ！」

モニカが抗議するが、俺は取り合わない。

「ああ、これはなんとも良い夢だな。夢よ、頼むから覚めないでくれ」

あくまでも、寝ぼけているというスタンスを崩さない俺に、モニカは呆れている。盛んにやめてと言うが、俺は意に介さない。彼女が実力行使をしないことをいいことに、俺の幸せタイムはそれから3

0分は続く。

朝食は、近所の宿屋で済ますことになった。大抵の宿屋は、金さえ払えば朝食を提供してくれるので、今日引き払う借家で朝食を作るよりは良い選択だろう。

「んもー、カインはボクの胸を揉みすぎですよ。ボクのことを好きでも恋人でもないのに、そういうことはやめてくださいよー」

モニカは、頬を膨らませて不機嫌そうだ。

「はははっ、そりゃあモニカの言うとおりだ」

そんな怒った顔のモニカが可愛いのか、シモネッタはけらけら笑う。だが、好きだったらしいのか？どうも、そう聞こえてしまう。まあ、俺の勘違いだろうがな。

アントニウスは苦笑するのみだ。もう、諦めているのだろう。なんとなく、俺は酒を飲むと手近な女を素っ裸にひん剥いて、後ろから抱きついて寝るからな。もっともそれ以上のことまで至らないので、大抵の女は許してくれるが。

「モニカが喜んでいるのは、言われなくても分かっている。そんなことより、船の出港時間が迫っている。早く食べてここを出よう」

珍しく俺が正論を言ったせいか、それ以降みんなは黙々と食事を済

ます。モニカも何か言いたそうだったが、結局黙って食べ続けた。

船に乗り遅れるというアクシデントは幸いなことに起きず、俺達は余裕で出港時間に間に合った。ここからは、情報交換の時間だ。

「それじゃあ、お互いの情報を言い合おうか」

そう言いつつ、俺は最初にモニカを指名した。次にシモネッタ、アントニウス、俺の順に情報を教え合う。

今、巷で最も噂になっているのは、もうすぐ魔王軍が帝国の東の首都目指して攻めてくるというものだ。

我々が暮らしているロマンム帝国は、マレノストルム海という最大幅が東西2000ミツレ・パッスース、南北1000ミツレ・パッスースの広大で複雑な形をした内海を囲むようにして成り立っているが、20年前に魔王軍の侵攻を受けて以来、領土の縮小が続いていた。

ちなみに成人男性の足のサイズが1ペース、その5倍が1パッススになる。で、5000ペースにあたるのがミツレ・パッスースといえば、内海の広大さがわかるだろう。東西の長さは、靴を1千万個並べた長さにもなるということだ。

魔王軍は20年前、それまで数百年以上動かなかった東の国境線を

越えて突然攻め込んできて、瞬く間にペトラエアをはじめとする3つの属州を占領した後、一部は東の大国であるドロス帝国に攻め入った。

残りはマレノストルム海の南沿岸に攻め込んで、このエリアは20年の間に魔王軍にほぼ征服されている。この南エリアは帝国領の1割以上を占めていて、帝国の穀倉である皇帝私領と5つの属州が失われた。

一方、ドロス帝国に攻め入った魔王軍だが、5年経ってから再びロマム帝国に攻め入り、5年で8つの属州を征服した。その間に東の都ビザンティウムと目と鼻の先まで来たのだが、ここに細長い海峡があったことから、海峡を渡らずに迂回していったため東の首都は無事だった。だが、この東エリアは帝国の2割以上を占めているうえ、幾つかの穀倉地帯を含んでいたため、帝国の被害は甚大だった。

それから魔王軍は再びドロス帝国に攻め入り、一部は北を目指して遊牧民の国家に攻め入った。それが10年前のこと。その後魔王軍は、ポントスという広大な内海を左回りに進み、着々と近隣諸国の征服を進め、今年中に帝国の北東から攻め入る勢いだというのがだ。

「しかし、状況は思った以上に悪いね。20年で帝国領の4割が失われているのか。このままじゃ、帝国はあと30年すれば消えて無くなるかもしれないねえ」

シモネッタは、冒険者として活躍するどころじゃないかもと言ってため息をつく。

「ま、最悪島に戻ればいいだろ。島で魔王軍に攻められたところはないんだしさ。なんとかなるさ、きっと」

俺が暗い雰囲気明るくしようと思って言うと、モニカが賛同する。

「魔王軍のことは、今のボクたちがいくら考えてもしょうがないですよ。それよりも、これからどうするのか、考えましょうよ。ボクは、できれば西に行きたいです。バエティカとか、ルシタニアとかどうですかね」

彼女は、帝国の西に行くことを提案する。だが、それは却下だ。

「いや、それは駄目だ。俺は、東か北に行くべきだと考えている。東に行って魔王軍のこの目で実際に見るか、北に行ってエルフの協力者を得るか、エリ才達の意見も聞かなきゃならないが、今はその線で動きたい」

俺が反対すると、モニカは真っ青になる。

「えーっ、魔王軍を見に行くんですかー。ボク、怖いですっ。魔族は人間を食べちゃうって聞きますし」

怖がるモニカとは対照的に、アントニウスは俺の意見に前向きなようだ。

「北もいいが、一度魔王軍を見ておくのもいいかもしれないな。いずれは戦う相手だろうし」

うん、いいね。さすがアントニウスだ。こいつはエルフだから、魔王軍といずれは戦うということがわかっていているようだ。

「魔王軍か。駆け出しの冒険者には、いささか荷が重いような気がするねえ。海路じゃなく、陸路でゆっくり仕事をしながら行くっていうんならいいかもしれないけどね」

シモネッタも、いきなり魔王軍と相対するのじゃなければ賛成してくれそうだ。

「まあ、正式決定はエリオ達の意見を聞いてからということでもいいな」

モニカが不満そうな顔をしているが、こいつは胸さえ揉めば大抵のことは聞いてくれるから、賛成してくれたのも同然だ。

こうして、魔王軍の行動を直接見たいと思っている俺は、慣れない根回しをするのだった。

第3話 カインの回想

俺は、ぼーっとしながら海を見ていた。船が次の目的地、交易都市であるマツスィリアに着くまでには、まだ時間があるからだ。マツスィリアは、属州ナルボネンスイスの交易の拠点であり、植民市として建設されてから千年以上も経つ、歴史の深い都市でもある。

ここで俺達は、仲間のエリオ達と落ち合う手はずになっている。有用な人材のスカウトも頼んでおいたので、もしかしたら新たな仲間を得ることになるかもしれない。エリオ達と合流するまでは、今のところ急いでやることがないので、俺はこれまでの苦難の日々を思い浮かべていた。

俺が魔王の息子として生まれた頃は、魔王軍は弱体化の一途をたどっていた。人間達との国境線は数百年も動かず、幾ら戦えども一向に勝利をつかめず、人間達の豊かな国土に攻め入ることが出来なかったからだ。

勝てなかった原因は明らかだった。兵士の絶対数が少なかったこと。弱兵であるオークが多かったこと。装備も貧弱どころか全く無かったこと。作戦や戦術を理解せず力押しだけで戦っていたこと。魔王領の大半を砂漠占めていて、食料や物資が圧倒的に足りなかったこと。他にも挙げればきりが無いほどたくさんあった。

こんな無茶苦茶な悪条件下のうえに、ロマヌム帝国とドロス帝国という、人口が推定で5千万人を超える2つの大帝国と戦っていたんだ。勝てなかったどころか、むしろ魔族が滅ぼされなかったのが奇跡と言ってもいいほどに、状況は最悪だった。

思うに、魔族が滅ぼされなかった要因は2つ考えられる。一つは砂漠にあったと思う。魔王領は、魔族を滅ぼしてまで欲しい土地ではなかったということだ。仮に魔王領が肥沃な大地だったら、間違いなく奪われて、魔族は滅ぼされていただろうな。

もう一つは、2つの大帝国に接していたことにあると思う。片方が魔王領の奥深く侵攻したら、背後をもう一つの帝国に衝かれる可能性があったので、両国共に魔王領まで攻め込むことをしなかったのだろう。人間達がみな仲良しでなくて助かった。

だが、その幸運もそう長くは続かなかったはずだ。何もせずに手をこまねいていたら、魔族は滅んでいたに違いない。そう思った俺は、魔王の息子に生まれた幸運を活かして、魔王領の改革に乗り出したんだ。

もともと改革以前に、赤ん坊である俺の指示に魔族達を従わせるのに物凄く苦労した。その苦労を語ると小説が何冊も書けるほどに長い、とりあえずそれは置いておく。

俺が最初に命じたのは、人間の国にむやみやたらと攻め入って、兵士の数を減らすような無謀な行為を全面的に禁止したことだった。いたずらに兵力や国力を浪費せず、富国強兵に全力を尽くすためだ。

戦いは数が物をいう。だから兵士を増やさなければならぬ。兵士を増やすには、子作りに励む魔族を増やす必要があり、必然的に戦いを無くすか減らす必要があったんだ。

数を増やすために、混血も増やした。なりふり構っている場合ではないからだ。魔族、竜族やダークエルフは、通常子作りが出来るようになるまで30年かかるので、子作り可能年齢が15歳である混血を増やす必要性が特に高かったからだ。

嫌がる者が多い中、男女各200人のダークエルフを半ば強制的に人間と子作りさせた結果、今ではハーフエルフが10万人近くになった。魔族も同じ位の数がある。竜族は元が少ないので、まだ5千人前後だが。このときの苦勞も半端じゃなかったな。思い出すだけで、目から滝のように汗が流れるぜ。

獣人族についても、ワーキャットやワーウルフだけ混血を増やした。両種族共に男女各150人から始めて、今では混血が各150万もいる。獣人族は子作り可能年齢が10歳なので、増え方も尋常ではないんだな、これが。

兵士を増やすめどが立つと、次は食料の確保が必須となる。いくら数が増えても食べ物が無ければ、待っているのは飢餓だ。そんな事態は考えるだけでも恐ろしい。

そこで俺は、魔王領の砂漠を農地に変えるべく数々の試みを行った。その際たるものが、台風を召喚だ。遠くの地から台風を召喚することによって、砂漠に大雨を降らしたんだ。物凄い手間と魔力を使うので、台風を呼べたのは年に1回だけだったが、10年かけて砂漠を緑に変えることに成功した。このときは、さすがにうれし涙を流

したつけ。

安定した食料供給が出来るようになるまで、更に5年の歳月を要したけれど、得たものは大きかった。ロマヌム帝国の穀倉地帯の、優に10倍の広さを持つ広大な農地が手に入ったからだ。単純計算で、5億の人間を養えるだけの農地を手に入れることが出来たんだ。これで輸送手段さえ確保できれば、兵士は食うに困らなくなるというわけだ。

このような富国強兵と平行して力を入れたのが、魔王子領の拡大だ。表魔王子領として、魔王領の2倍もある大陸といってもいいほど大きな島と、魔王領の2割程度の大きさの島を選んで魔族を移住させた。表魔王子領では、魔族との混血を増やす目的で人間との共存を目指したため、ロマヌム帝国やドロス帝国から遠く離れた地を選んだ。ここには、妖魔族、魔人族、獣人族を移住させ、魔族と人間の混血を平和的な方法で増やしていった。

裏魔王子領として、大小4つの無人島に魔族を移住させた。このうち2つの大きな島には、竜族、半獣族、亜人族、魔獣族、海獣族を移住させた。小さい方の2つの島には、魔人族、妖魔族、獣人族を移住させた。後者には、将来的には人間を移住させるかもしれないと思ったので、比較的人間に近い魔族のみを移住させることにしたんだ。

これら表裏魔王子領が順調に発展していくなか、俺は人間の国にスパイを潜り込ませて様々な情報を集め、有益な情報や技術を魔王子領に与えて領地の発展に大きく寄与した。そういや、スパイ共がなかなか言うとおりに動かなくて困ったな。あ、また目から汗が流れ

そうだ。

そして、魔王子領を建設してから5年ほどして、人間の国を密かに支配下におくことにした。これを、隠し魔王子領と呼んでいる。最初のうちは失敗も多かったし、このときの苦勞を語ると長編小説が書けるほどだが、とりあえず今はおいておく。

時には俺が発狂寸前になるほどのアクションを乗り越えたおかげで、今ではほぼ完全に領内を支配下に収めることが出来るようになった。今では、隠し魔王子領を足がかりにして、ロマンム帝国とドロス帝国にかなりの影響力を行使出来るようになっていて。実は、既に両帝国は支配したも同然の状態になっている。何故かと言うと、俺が金と食料を独占しているからだ。

隠し魔王子領から得た情報によって、人間にとっては金が重要であることを知ったため、配下の魔族に金の生産を命じ、その金を元手にして大商會を幾つか密かに傘下に収めた。その商會は急速に発展し、今では両帝国の經濟を牛耳っているんだ。金貨の鑄造も俺の息がかかった商會が独占しているため、事実上俺に齒向かえる商會はない。

食料も似たような状況だ。ロマンム帝国の穀倉を幾つも占領してきたので、帝国の食料生産能力はガタ落ちだ。普通に考えれば帝国内で食料生産すればいい話だが、そうはならなかった。俺が占領地の食料を隠し魔王子領を通じて、帝国各地に供給したからだ。

今では帝国の食料のうち、おそらく7割近くが占領地産となっていないはずだ。俺の意思一つで食料の供給は止まるが、実際に食料供給が止まったら、帝国は崩壊するだろう。商會に食料を買占めさせた

後で実行すれば、帝国は飢餓地獄と化すだろう。そんなわけで、単に帝国を滅ぼそうと思えば、今でも可能な状態なんだ。今の俺は、実質的にロマヌム帝国の命運を握っていたりする。

とはいえ俺の目的は、新たな国家の建設なので、ロマヌム帝国には俺に都合の良いように衰退してもらい、都合の良い時に滅びてもらうつもりだ。あるいは、俺が帝国の皇帝になってもいい。可能性は極めて低いが、上手く立ち回れば案外本当に皇帝になれるかもしれない。

魔王子領に住む魔族は、皆俺に絶対の忠誠を誓っている。魔王軍の上層部も、俺の配下で固めている。だから配下を上手に操って、俺の描いた筋書き通りにロマヌム帝国には滅びてもらい、俺が建国する新国家が魔族を駆逐して強大な国家として君臨することになる。

俺は魔族を撃退した勇者として、未永く語り継がれることになるだろう。勇者カインの物語が、後世まで語り継がれると嬉しいな。

だが、そんな俺の夢は上手くいくのだろうか。俺は強い自信はあるのだが、一方で不安がどうしても拭えない。とはいえ、俺の旅は始まったばかりだ。しばらくは、純粹に旅を楽しむことにしよう。

第4話 エリオとトマス

それほど長くない船旅を終えて、俺達はマツスィリアに到着した。

この港湾都市は、州都ナルボ・マルティウスに次ぐ、属州ナルボネンスイス第2の都市だと言われている。人口はどれくらいだろうか。小耳に挟んだ話では、州の人口がここ20年で倍になり、300万を超えたとか。そのうち2割が州都で1割がここだとすると、30万は超えているかもしれないな。

しかし、流石は港町だ。たくさんの船が並んでいる。いろんな地方の船が来ているみたいで、種類も様々だ。ほとんどは商船のようだが、中には軍艦もある。

俺は砂漠で生まれ育ったせいかな、海や船が珍しくて大好きだ。特に海はいつ見ても飽きないくらいだ。港もそうだ。特にこの港みたいに、多くの船が行き交う港は大好きだ。

「あんな、カイン。さっさと行くぞ」

俺が港を見渡していると、アントニウスの奴が急かしてきた。気のせいか、エルフ特有の耳がいつもより尖っているように見える。いけね、待ち合わせの時間まで、あまり無いのを忘れていたぜ。

「んもー、カインはいつも遅いですよ」

「あはは、違うないね」

モニカとシモネッタも、俺のことを責めはじめた。モニカは口を尖

らせているが、ダークグリーンの眼が丸く開いているせいなのか、正直言つてあまり怖くない。シモネツタは、そもそもあまり怒っていないようだ。ちよつと大きな目の胸を揺らして、けらけら笑っているし。とはいえ、ここでぐずぐずしててもしょうがない。

「はは、悪いな。じゃあ、エリオ達に会いに行くか」

俺は笑つて歩き始めた。

「よお、久しぶりだな。有望な団員は集まつたか？」

待ち合わせの酒場に行くと、昼間つからエリオとトマスが酒を飲んでいて。二人とも顔を真っ赤にして、なんだか機嫌が良さそうだった。どうして機嫌がいいんだろうか。何かいいことがあったのか。

奴らはここで新入り団員探しをしていたはずだから、機嫌がいいということは、素晴らしい人材を確保出来たからだという可能性が最も高そうだ。うん、これは、新入りの団員に期待出来るかもしれないな。

そうそう。エリオは、俺達の冒険者パーティーであるエリオ団の団長だ。で、副団長がアントニウス。ただし、それは表向きのこと。実際は、団の最高権力者は俺なのだ。まあ、理由はおいおいわかるだろう。

エリオは、俺と同じ位背が高く、がっしりとした体格をしている。槍を持たせたら、敵無しとまで言われているほど強い槍戦士だ。短く刈り上げた金髪が、彼の精悍さを際立たせている。ダークグリーンの眼を大きく開けて笑うことが多い。とても頼りがいのある仲間だ。確か20歳になったはずだ。

エリオと俺が最初に出会ったのは、確か1年ほど前になる。場所はシキリアという、マレノストルム海の中で最も大きい島だ。その酒場で奴が喧嘩をしていたんだが、多勢に無勢でボコボコにやられそうになったところに俺が加勢して、助けてやったんだ。

その時以来、奴は俺に恩義を感じたらしく、何かと手助けをしてくれるようになったんだ。そこで何度か酒を酌み交わしたりして仲良くなり、そのうちギルドと一緒に仕事を請け負うようにもなった。

そうしてある程度気心が知れた頃になってから、俺は自分の計画を奴に話したんだ。そう、冒険者パーティーを結成して、世界中を旅して回りたいという計画をだ。

奴は最初は驚いていたが、少し考えて幾つかの問題点を指摘した。端的に言うとなんのことだ。旅を続けるには相応の金が必要だし、旅の途中で金を稼ぐことが出来なければ、最悪の場合飢え死にしてしまう。それ以前に旅するには装備を調えなければならないが、それにもかなりの金が必要になるという。

そこで俺は本当のことを言うかどうか迷ったが、結局その場では結論を出さなかった。どうせ俺は自分が魔王の息子であることを隠しているのだし、嘘を言うことにためらいはない。とはいっても、の、上手に嘘をつく必要があるので、少し時間を稼ぐことにしたんだ。

すると良い考えが浮かんだ。金持ちのスポンサーを見つけたが、スポンサーの意向は世界中に埋もれているであろう、魔王軍と戦うことが出来る人材を見つけ出すことだということにしたんだ。これならいずれ魔王軍と戦うという目標を掲げても、魔王軍と戦うための軍勢を組織するために動いても、辻褄は合うはずだ。

さすがに俺も、いきなり魔王軍と戦うために旅をしようなんていう誰もがドン引きするような目的は言えなかったんだ。だから俺はエリオに対し、俺達の目的は魔王軍と戦うための人材発掘だと話し、奴の賛同を得ることに成功した。

こうして、俺とエリオは近いうちにエリオ団を結成し、世界を旅して回ることを誓い合ったんだ。だから、現在は人材発掘がエリオ団の目的ということになっている。

トマスは、俺やエリオよりもやや背が低く、筋肉質な体格をしている。剣の腕は一流で、滅多な奴には遅れをとらない。茶色の髪を短く刈り上げていて、エリオに劣らず精悍に見える。普段は無口で、緑の眼をしっかりと見ていないと、感情が読み取れない。不言実行の人で、エリオとは違った意味で頼りになる。確か、19歳のはずだ。

奴と出会ったのは、半年ほど前になるだろうか。場所は、ナルボネンスイスのはずれだったか。はぐれ魔族、確か亜人族のゴブリンに襲われて死に掛けていたところを、俺とエリオの二人がかりで助けたんだ。俺が神聖魔法で傷を癒さなければ、おそらく奴は仲間の後を追って死んでいただろう。

そんなことがあったせいか、奴は俺に対してエリオ以上に恩義を感じ

じたらしく、エリオ団の話をしたら直ぐに仲間に加わりたいと言ってくれた。こうして、俺は頼れる仲間を二人も得たというわけだ。

「みんな、元気そうだなによりだな」

俺がエリオやトマスとの出会いを思い出していたら、アントニウスもエリオとトマスに声をかけた。久々に仲間の無事な姿をみたせいか、アントニウスは嬉しそうだ。もっとも、奴らに何かが起こるとは思えないがな。だが、仲間との再会を喜ぶ男達とは違い、女共の思惑は多少違ったようだ。

「で、どうなんだ。有望な仲間は見つかったのかい」

「ボクも早く知りたいです」

なんて感じで、シモネッタとモニカは人材のスカウトが上手くいったのかを、早くも知リたがっている。まあ、気持ちは分かるんだけどな。だけど、そこまで急ぐことかというのと、大いに疑問が残るんだが。

「まあ、そう急ぐな。夜には会わせてやるから。話はその時でいいだろう」

エリオはそう言ってはぐらかし、トマスは無言で頷きエリオに同調する。うん、これは何かあるのかな。別に隠す理由がなければ、ここで知っていることは教えてくれてもいいんじゃないかって思うけどな。話さないとすると、何か事情があるんじゃないかな。

「なんだい。そりゃ残念だね」

「んもー、早く知りたいのに意地悪ですよ」

エリオの態度に、シモネッタとモニカは不満そうだ。まあ、こいつらに気持ちも良く分かる。これから苦楽を共にする仲間になるかもしれないんだから、どういう奴なのか早く知りたいと思うのは当然だろうに。たとえ何か事情があつたとしても、黙っていてもしょうがないと思うんだけどなあ。

「悪いが、それよりも急いで情報交換がしたいんだ。お互いに、知っている情報は全て出し合おうぜ」

そう言うなり急に真剣な表情になったエリオに、女達は渋々引き下がった。

第5話 装備品

「なるほどな。東方に行つて魔王軍をこの目で見たいというのか。確かにそれもありだろうな」

エリオは、俺の提案にどうやら賛成してくれそうだな。エリオ団の表向きの目的は、魔王軍と戦うための人材発掘なのだから、肝心の魔王軍のことを知っておいた方がいいと思つたんだろう。

「俺は船で行つてもいいんだが、旅をしながらの方がいいっていう意見もあつてな。陸路で行くのもありかなと思つている。ただ、陸路だと選択肢が多くてな。なかなか考えがまとまらないんだ」

話した後で俺は苦笑する。陸路の方は選択肢が多いのだが、俺には地理的な知識が無いために、どのルートがいいのか分からないんだ。それは多かれ少なかれ、この場の全員に言えることなんだが。

シモネッタとモニカは、生まれ育つた島から出たことは少ないと言っているし、エリオは島育ちだし、トマスはナルボネンシスから出たことがあまり無い、アントニウスは北方の国出身。そうになると、恐ろしいことに俺が最も東方の地理に詳しいことになってしまう。

「それなら、思い切つて北回りにするのもいいかもしれん。幸い、新入り候補が二人とも北方出身だな。新入りの話を聞いてから、もう一度話し合おう」

なんてエリオは言うが、何だと。新入り候補は二人なのか。それも北の国出身か。帝国出身でないのは気になるが、まあエリオ達が選

んだ奴らだ。多分大丈夫だろう。

「でもそうになると、装備の買い付けが出来ませんよ。どこに行くのかによって、必要な装備は変わりますからね」

モニカの言うことはもっともだ。だが、今回ばかりはちと違う。

「あー、モニカ。お前の言うことは間違っではないが、今回は事情がちよいと異なるんだ。既に主な装備については、購入の手配を済ませてあるんだ」

そう、今回は俺がかなり頑張って装備を用意しておいたんだ。しかもその多くは、行き先によって変わるようなものじゃない。もっとも、このことを知っているのはエリオとアントニウスだけなんだから。

「えーっ、ちよっと待ってくださいよ。ボクだって、好きな装備を選ぶ権利があると思います。勝手に装備品を手配するなんて、ちよっと酷いと思います」

「そうだね。さすがに今回ばかりは、モニカの言い分の方が正しいんじゃないか。装備品は、自分の命に関わるんだよ。それを他人任せに出来ると、本気で思っているんじゃないだろうね」

おおっと。モニカだけでなく、シモネッタまで文句を言ってきたよ。なんだか雰囲気も悪くなっちゃったな。ここは早いとこ、事情を話すしかないか。

「ああ、シモネ。確かにあんたの言うとおりだが、ちよいと俺の話も聞いてくれ。俺は装備品の手配をしたが、それを無理に使えとは

言わない。だがな、文句を言うのは俺の話聞いてからにした方がいいと思うぜ。それに、あんたの装備品については、エリオからの要望に基づいて手配しているんだぜ」

「なに、エリオの…… まあ、いいだろう。とにかく話を聞くよ。それでいいんだね」

エリオの名前を出したら、途端にシモネッタは大人しくなっちゃまった。こいつは、エリオに惚れているから、まあ当然の反応だろうな。ようし、聞いて驚くなよ。

「ではいいかな。最初にシモネの装備品だが、武器は銀の剣を用意した」

「なっ!」

おうおう、シモネッタめ。目を真ん丸くして驚いているよ。声もないほど驚いたっていうやつか。そりゃそうだな。銀の剣なんて、滅多なことでは手に入らないからな。買うとバカ高いし。

「そして、兜は銀の兜」

「なにっ!」

「盾は、銀の盾」

「なぬっ!」

「最後に、銀の鎧」

「ぬおっ！」

「あ、でも他人任せには出来ないんだっけ。残念だが、シモネのために用意した装備は、新入りにあげるか」

俺が笑って言うと、シモネッタは俺に駆け寄って両手を握り締めた。

「いや、いい。カイン、私が悪かった。せつかくお前が選んでくれた装備だ。大事に使わせてもらうよ。だから、新入りにあげるなんて意地悪なこと、言わないでくれ」

あはは。シモネッタめ、真っ青な顔をしてやがる。そりやそうだな。こんな高い装備、田舎の冒険者には、逆立ちしたって用意できるはずがないもんな。間違いなく、シモネッタが買おうとしていた装備よりも数段良い品だろう。

「ん、そうか。まあ、欲しいって言うならあげてもいいが」

「うん、欲しい。欲しいったら欲しいよ」

彼女があまりにも真剣な表情で言うもんだから、思わず笑いそうになっちゃった。

「なら、シモネにあげるよ」

「ありがとう。恩に着る」

なんと、彼女は涙を流して喜んでいる。うーん、ここまで喜ぶとは思わなかったな。やはり俺は、人間のことをあまり理解していないらしい。俺にとっては簡単に手に入る装備で、こんな反応が返って

くるなんて、予想できなかったからな。これはちょっと気前が良すぎたのかな。まあ、悲しむよりはマシだと思えばいいか。

俺がそうやって自己完結していると、モニカがぐいっと顔を近づけてきた。おいおい、お前近寄りすぎだぞ。それじゃあ、口と口がくっついちゃうだろうが。

「ねえ、カイン。ボクの装備は何なのかな。お・し・え・て」

モニカは、顔と顔がくっつきそうな距離まで近寄ってきた。あのなあ、いくら俺に惚れているからって、あまりにも露骨じゃないか。周りのみんなもドン引きするだろうが。

こいつは普段はツンツンしているくせに、たまにこうやってデレデレするんだよな。人間の女って、よくわからねえよな。こいつが普通なのか、それともそうじゃないのか、俺にはまだ理解できん。だがまあ、質問には答えてやるか。

「モニカの装備品だが、武器は銀の杖だ」

「やたっ！」

「加えて、銀の弓」

「よしっ！」

「帽子は銀の帽子」

「やりっ！」

「盾はなし」

「ははっ、そうだよな」

「最後は未定」

「へっ！ちょ、ちょっと、どういふことなんですか？」

最後のセリフに、モニカはずっこけそうになったが、なんとか持ちこたえて俺の肩を掴んで揺すりだした。

「ちょいと訳ありの品があつてな。今はまだ、誰に渡すのか決めてないから言えないんだ」

俺がそう言い訳すると、モニカの奴、興奮して更に俺の肩を揺らしやがる。

「ええっ！言えないほど良い品があるんですか？それなら私にくださいっ！お願いしますよっ！」

「そうは言ってもな。優秀な新入りが入団したら、そっちに回した方がいいかもしれないだろ」

まあ、理屈で考えればそうだよな。だが、こいつには理屈が通じなかった。

「もしかして、新入りがボクよりも綺麗な女性だったら、その人にあげちゃうつもりじゃあ。もしそうだったら酷いですよ。入団試験のこと、忘れないでくださいよね。ボク、初めてなのに頑張っ、いつ、三日三晩やられまくったんですからねっ！」

あはは、俺の魂胆バレバレか。でもいけね、素で入団試験のこと忘れてた。そっぴや俺、そのときにこいつを騙して、さんざん好き勝手したんだよな。

話はちよいとそれるが、エリオ団に入るには入団試験がある。主に戦闘や知識に関してのものだが、女性には特別試験がある。ぶっちゃけて言うと、男性経験の有無を調べる試験だ。男性経験が無い女だと、様々なデメリットがあるんで、お断りしているからなんだ。

一例を挙げると、レイプされて取り乱したり、精神異常をきたして最悪自殺しかけたりするのは未経験者が多い。他にも男に免疫が無くて、簡単に騙されたり。とにかく厄介なこと、このうえない。そこで、未経験者はお断りしているわけ。

それで、経験の有無を調べるために特別試験をするんだが、試験をしたらあら不思議。どういうわけか未経験者も経験者になってしまっうんですね、これが。その特別試験を、俺はモニカを騙して1週間休まずに続けたんだ。モニカが騙されたと気付いた時には、時既に遅し。

ところが、モニカは騙されたことがよっぽど悔しかったのか、他人には1週間ではなくて3日だったことにして欲しいと頼み込んできた。俺もその方が都合が良かったんで、仲間はみんなモニカの特別試験は三日三晩だと思っている。それでも鬼畜だとかたまに言われるので、彼女の頼みを聞いて正解だったと思う。

彼女は、おそらく俺が騙したことを言っていると思うんだが、その点を言われたら返す言葉は無い。これは、俺の負けかな。そのうえ俺は、試験は原則1日であることや、女には相手を選ぶ自由がある

ことを話していない。色々と嘘をついているので、この話題は触れてほしくないよな。

「分かった、分かった。お前には、シルバーメールをやるから。だから、入団試験のことは二度と言っなよ」

俺の返事を聞いて、モニカは大喜び。

「よっしゃあつ！シルバーメール、いただきっ！」

女って、なんて現金なんだ。こいつ、ぴょんぴょん飛び跳ねて喜んでいるぜ。まあ、可愛いから許すけどな。まったく、人間って奴はよくわからないな。しかし、勇者になるには人間のことを良く知らないといけないだろうし、そもそもうつかり自分が人間でないことがバレてしまいかねない。

ふうっ。勇者への道のりは、まだまだ遠いようだ。

第5話 装備品（後書き）

惜しげもなく銀製の装備を仲間に配るカイン。金銭感覚が仲間と大きく乖離しているようです。

モニカは、見た目に反してかなりしたたかなようで。初体験をネタに、カインに対して高価な装備をねだります。なお、モニカがカインに惚れているというのは、あくまでカインの主観です。彼女がカインの財力に大きな魅力を感じている可能性は、否定できないでしょう。

第6話 ヘルガとネリー

夜になって、新入り候補も含めてエリオ団全員が集まった。ただ、あまり人に知られたくない話をするかもしれないので、酒場は避けて俺が借りている家に集まることにした。以前は商人の家族が住んでいたとかで、優に10人以上は泊まること出来る大きさの家だ。

その家の食堂にはしつかりとした造りをした長方形の大きなテーブルが置いてあり、近くの酒場から運び込んだ酒や食事が所狭しと置かれている。エリオが飲み食いしながら話そうといい、みんなが賛成した結果だ。

今、目の前には二人の新入り候補が座っているが、正直言つて俺は驚いている。なんと、新入りは二人とも女だったんだ。これ以上女がいても役に立たないと思っていたので、エリオの選択には疑問は残る。

だが、エリオのことだから、何か理由があつてこうなったのだろう。ここで反対してもいいんだが、それが原因で冒険に大きな支障が出て困るので、俺はとりあえず様子見を決め込むことにした。

「では、紹介しよう。こちらがヘルガ、曲芸士だ」

食事や酒の用意が終わり、全員が席に着くと、エリオが新入りの紹介を始める。それに応えて、新入りは入団を認めてもらおうと精一杯自分の売込みを図るのだろう。

「アウストラシア王国出身のヘルガよ。得物はダガー、曲芸士をやっているわ。強行偵察から潜入まで、何でもござれよ。是非みなさんの仲間にして欲しいわね」

最初に紹介されたのは、しなやかな豹のような印象を与える娘だ。金髪は、肩に届かないよう切り揃えてある。絶えず笑顔を浮かべているにも係わらず、ダークグリーンの眼は笑っておらず、一筋縄ではいかない女であることが伺える。

明らかに筋肉質とわかる体型は、曲芸士としての実力が高いのではないかという期待を抱かせる。胸はそう大きくはないが、激しい動きをする曲芸士ならば当然だろう。

顔は、中の上といったところか。顔はやや小さいが、鼻筋は通っている。小顔のせいか、身長が実際よりも高く見える。

「こちらがネリー、伝道士だ」

「みなさん、はじめまして。ニューストリア王国生まれのネリーです。神聖魔法の使い手ですので、みなさんが怪我などされたときは、精一杯治療をさせていただきます」

次に紹介されたのは、静かで大人しい良家の子女という印象の娘だ。こんなんで冒険者が務まるのか、ちょっと不安だが。彼女の奇麗で長い金髪は、背中まで伸びている。柔らかな笑みを浮かべており、品のある仕草などから見ても、これまであまり苦労しないで生きてきたように見える。

あまり筋肉が無いスレンダーな体型であるが、胸はモニカよりも大きい。さきほどからモニカが難しい顔をして、彼女の胸を睨みつけるようにして見つめているのが笑える。そんなに他人の胸の大きさが気になるものなのかな。

顔は上の中で、モニカよりもワンランク上といったところ。どちらかというと子供っぽくて可愛いという印象を受けるモニカに対して、貴族の娘のような気品を備えて奇麗というのがネリーの印象かな。あまり冒険者らしくはないが、外見だけで判断していいものか迷うところだ。

「とまあ、自己紹介はここまでにしよう。今日は、新入り団員の歓迎会だからな。あとは飲み食いしながらゆつくりと話し合って、親睦を深めようじゃないか。ではみんな、食事を始めよう。乾杯の用意はいいかな」

エリオは、そう言いつつ杯を手を持っている。中身はワインだろう。俺は酒が好きな方ではないが、仕方がない。ここはエリオに従って飲むとしよう。

「『乾杯！』」

エリオの音頭で乾杯し、宴会が始まった。

宴会が進むうち、いつの間にかヘルガにトマスがすり寄っているのに気が付いた。ふうん、トマスはヘルガ狙いか。そこでネリーの方を見てみると、エリオがしきりに話しかけてる。エリオとは反対側にはシモネッタがいて、エリオをけん制しているようだ。俺は少し考えた後で、ヘルガの隣に移動した。

「よう、ヘルガ。楽しく飲んでるかい」

俺が声をかけると、彼女は赤い顔を俺に向けて微笑んだ。

「ええ、楽しく飲んでるわよ。あなたがカインね。噂は聞いているわ」

彼女が俺の方を向くと、トマスが渋い顔をした。だが、そんなのは無視だ。

「アウストラシア王国出身なんて、珍しいな。今度ゆっくり、話を聞きたいところだ。それはさておき、特別試験のことは聞いているか？」

俺が尋ねると、彼女は少し顔を赤らめながら頷いた。この反応を見るかぎりでは、きつと知っているのだろう。

「ええ、聞いたわ。まったく、とんでもない試験を考えるわね」

そう言いつつ、目を細めて俺を見る。あらま。これは、発案者が俺だってことを、誰かから聞いているな。誤解されるのも嫌だから、何か言い訳しなくちゃな。

「とんでもないか、確かにその通りだ。だが、結局は男と女が一

緒に冒険すれば、遅かれ早かれそういう関係になっちまうんだ。中には騙したり、無理やりっていうこともあるだろう。それと比べりゃ、俺達は正直でいいと思うけどな」

よく聞く話だが、恋人がいない女が冒険者になった場合、いずれは仲間の誰かにレイプされる。最初のうちは優しくしておいて油断させ、抵抗出来ない状況になった時にいきなり襲い掛かるという手口が多いようだ。

そんなのと比べれば、入団時に心構えをさせておく我がエリオ団の方式は、良心的だと思うんだが。

「まあ、確かにそういう理屈も成り立つわね」

「だよな。で、入団試験の相手に、俺を選ぶっていうのはどうだ」

俺が彼女に軽く誘いをかけると、邪魔者が現れた。

「やめといた方がいいですよ。カインはヤルだけやったら、後は知らん振りですからね。しかも、女の気持ちなんて全然理解しないでとにかくやりまくるんですよ。本当に、サイテーです」

モニカめ、俺に何か恨みでもあるのか。俺は絶対にやめた方がいいと、熱心にヘルガに説いている。それを聞いたトマスは喜び、ヘルガはモニカの話の聞いてドン引きしてる。

まずいな。やっぱりモニカは俺のことを恨んでいたのか。やっぱり、1週間やりまくったのはまずかったかな。しかも、これで当分女を抱けないと思ったんで、好き放題しちゃったからな。

モニカの奴、何回腰を抜かしたっけ。それなのに、俺は気付かないフリをしてやりまくったんだよな。1週間経った時には、魂が抜けたようにぐったりとしていたっけ。その後もしばらくモニカは寝込んでんだよな。

まずいな、こうして思い出すとかなり酷いことをしてるな、俺は。こんな話をヘルガに知られたら、かなり不利になるじゃないか。

その後俺は、なんとかヘルガの気を引こうとして頑張った。武具や防具の話をしたり、魔法の話をして、とにかく彼女の気を引いた。そうして、どうにか最後には彼女と仲良く話せるようになった。自分としては、なんとかトマスと五分五分にまで持ち込めたと思っている。

彼女は一晩考えたうえで、明日に特別試験を受けるかどうか、受ける場合相手を誰にするのかを決めることになる。彼女が選ぶのは、果たして俺か、それともトマスか。また、もう一人の女が選ぶのは、果たしてエリオかアントニウスか。

全ては、明日に決まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4593x/>

魔王の息子だが、勇者になる！

2011年11月11日21時55分発行